OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	潜在する型取り ： 更級日記の世界形成,物語より宗教への転換期における
Author(s)	深沢, 三千男
Citation	語文. 1988, 51, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68783
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

潜在する型取り

——更級日記の世界形成、物語より宗教への転換期における——

深沢三千男

(1) 長久元年（一〇四〇）33歳春——かう（宮仕えに）立ち出でぬとならば、さても宮仕への方にもたち馴れ、世にまぎれたるも、ねちけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしもてなさせ給ふやうもあらまし。親たちもいと心得ず、ほどもなく籠め据ゑつ。

の不本意に著者が宮仕えから退かされた記事につき、犬養廉氏などによれば[1]、天喜五年（一〇五七）八月二七日、夫俊通の信濃守赴任の旅立ちに伴なった長男仲俊の姿から見て、仲俊の出生を夫が下野より帰京（寛徳二年＝一〇四五）後とすると、十二歳以下になって不適当だから、夫の下野赴任時期とのからみで長久二年秋までには出生ずみと考えられる。だからこの時期には著者は結婚済みだったと考えたい。

(2) その後著者の物語熱も醒めて行き、これまで信心のわざにも努めずに、うかうかと多くの年月を空費して来た事を後悔し、

——このあらましごととても、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光る源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薫大将の宇治に隠し据ゑ給ふべきもなき世なり。あな物狂ほし。いかによしなかりける心なりと思ひしみはてて、……

とあるように結婚を転機として心境の変化を来たし、現実に目醒め始めるのだが、さりとて家庭婦人に徹するわけでもなく、めいの出仕にもひかされてずるずると中途半端な宮仕えを続けるうち、……

(3) 長久三年（一〇四二）35歳初冬、祐子内親王の御前に宿直中朋輩を横に、紫式部日記のやはり御前の宿直仲間大納言の君のけはいを恋しく思った、「うき寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛に歹えぞ劣らぬ」の歌に似た、「わがごとぞ水のうき寝に明かしつつ上毛の霜を払ひわぶなる」の歌を詠む。

この点については、紫式部日記のこの段に情趣の似通うものがあるとの御指摘が既にある[2]。

(4) 同じ時（記事順としては少少さかのぼるか？）「十月ついたちごろ」の不断経の夜、——そなた近き戸口にふたりばかり立ち出でて聞きつつ、物語して寄り臥してあるに、まゐりたる人（源資通）のあるを、「逃げ入りて局なる人々呼び上げなどせむも見苦し。さはれ。ただ折からこそ、かくてただ」と言ふ

いまひとりのあれば、傍らにて聞きゐたるに、おとなしく静やかなるけはひにて物など言ふ、口惜しからざなり。（著者の存在に気づいて）「いまひとりは」など問ひて、世の常のうちつけのけさらびてなども言ひなさず。世の中のあはれなることどもなどこまやかに言ひ出でて、さすがに厳しう引き入り難い節々ありて、我も人も答へなどするを、……

(5) 「秋の末つ方」八宮が四季念仏で寺籠り不在中の夜来訪した薫の応対に、場慣れした「奥深き」女房を、「久しく」かけて起こして出てもらうのもわざとらしいので、止む得ず大君自ら応対する【橋姫】。

(6) （薫は）その頃十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべきほどよりは、心おきておとなおとなしく、めやすく、……【竹河】

(7) （薫は）世の常のすきずきしさも見えず、いといたうしづまりたるをぞ、ここかしこの若き人（女房）ども、口惜しうさうざうしきことに思ひて、言ひなやましける。【竹河】

(8) 八宮の死後薫から強く迫られた大君は、薫に悪い感じは持っていないが、自分は独身を通し、若い盛りの中君の方を縁づかせようと決心する【総角】。

(9) 右の前段階、薫は大君と深い語らいをする——おほかたの世の中の事ども、あはれにもをかしくも、さまざま聞きどころ多く語らひ聞え給ふ。……挙句大君は遮蔽具を押しのけて入り込んで来た薫に捉えられ、添い寝された状態でひどく辛がりはするものの、薫の強い自制もあり、「常なき世の御物語に、時々さしいらへたまへるさま、いと見所多くめやすし」という状態で夜を明かしてしまい、別れに際して薫は——「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひ聞え給へば、（大君も）やうやう恐ろしさも慰みて、……物隔ててこそ隔意のない旨を答える【総角】。

源資通との初接触を語る(4)の「十月……」は、(5)の大君との初接触に季節的に一致し、「ふたり」ペアになる点にも大君・中君のペアに通うものがある。応対係の女房を呼び上げるのがわずらわしいからという、状況的一致の点も注目される。それに資通の目立たぬもう一人を仲間外れにすまいという八方美人的配慮も薫的であろう。「おとなしく静やか」「世の常ならず」「世の中のあはれなることども……」など(6)(7)(9)の該当箇所と照合すると、色めかしからぬ点源氏や匂宮とは全く異質的で、源氏などよりむしろ薫の雰囲気に共通するものがあるのではなかろうか。「いまひとり」を表に立てて、自分の方は極力後ずさりしている意識は(8)に示した大君に似通い、後出(12)に見られる「もろともなりし人」のように、著者自身も宮中に留まれば、資通との接触を維持できなくもなかったのではなかろうか。

(10) （資通は）春秋の事（△「争」ノ誤写説モアリ）などいひて、……春霞、春の朧月、琵琶の興、秋の明月、霧、その他に箏、横笛の興、冬の冴えた空、雪、箏楽の興（全て音楽にかかわるのは、音楽の名手たるにふさわしいが）を語って、「いづれ（の季節）にか御心留まる」と問われ、先に秋の夜と答えてしまった朋輩に賛成してしまったのでは、話は活性化しないので、著者は春の月景のすばらしさを讃える歌を詠むと、資通はすっ

かり感動し、命のあらん限り春の夜を思い出のよすがにしようとの対詠で、秋に心寄せの朋輩のすねた対詠を呼び起こす。資通は女房二人の対立にわざと困ったふりをして、話題を冬に転じ、伊勢の斎宮御所に使いして、感銘深い昔語りをする老女房に接しての冬の夜の、琵琶の演奏にも関連して、終生忘れられない思い出を語り、それに比せられるべき、今宵のような冬の時雨降る闇夜の事も、終生忘れられない思い出になるだろうなど言って別れた後、「誰と知られじ」と思ったのは、この夜の事について、互いのきれいなよき思い出だけ大切にして、いやな面まで見られ合うような腐れ縁は持ちたくないとの思い（秋山虔氏の御注釈[3]にもとずく）からだろうが、再会する事になってしまう。

(11) 薄雲巻で源氏の梅壺女御に対する春秋比較論の中で発想され、少女巻で四方四季の殿六条院が実現を見る。

(10)で延延と展開される春秋比較論は、源氏物語の(11)を響かせ、うけつぐのみならず、(9)の「月をも花をも」をも響かせ合う事で、実は薫対大君にもかかわっていたのであった。

(12) 長久四年（一〇四三）36歳——又の年の八月(正シクハ七月)に、内へ入らせ給ふに、夜もすがら殿上にて御遊びありけるに、この人の侍ひけるも知らず、その夜は下に明かして、細殿の遣戸を押し明けて見出だしたれば、暁方の月のあるかなきかにをかしきを見るに、履の声聞こえて、読経などする人もあり。読経の人はこの遣戸口に立ち留りて、物など言ふに答へたれば、ふと思ひ出でて、「時雨の夜こそ片時忘れず恋ひしく侍れ」と言ふに、こと長う答ふべきほどならねば、　何さまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを　とも言ひやらぬを、人々又来合へば、やがて滑り入りて、その夜さりまかでにしかば、もろともなりし人たづねて、返ししたりしなども後にぞ聞く。『ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶の音のおぼゆる限り弾きて聞かせむ』となむある」と聞くにゆかしくて、我もさるべき折りを待つに、更になし。

「読経の人」たる点を強く印象づけられた資通には、若くして宗教に強く傾斜した薫のイメージを思い起こさせられる。なおこの場合著者は前にも触れたが、多少の無理を冒せば、「もろともなりし人」のように、資通と再会する可能性を維持すべく、宮中に留まれなくはなかったのではなかろうか。この場合資通も著者を深追いしないし、孝標女の方もねばらない。多少なりとも積極的に求めれば得られなくもなかった機会を、消極的に成行きまかせにする事で、自ら故意にその可能性をつぶしてしまっている感がある。こうした点については忍ぶ恋路的配慮であり、夫不在中の人妻だからでもあるとの御指摘[4]、資通との交渉に二人ペアを強調する意識は、著者は既に人妻であり、しかも夫は下野守で不在中だった為の配慮との御指摘[5]があるが、それだけで割切れない深さもあるのではなかろうか。

なお資通との交渉をめぐって中嶋朋恵氏は、朝顔巻の二条院での紫上との女人品定めのプロローグ、ならびに若菜下巻の六条院女楽を目ざす音楽ブームの最中の、源氏の雪月の景に接しての冬の美の評価、なかんずく後者での音楽との深い関連をもとに、春秋優劣論から冬への評価への発展を更級日記が受けつぎ、細かい表現まで似通っている事を御指摘になられた[6]。ただし野口元大氏は右説を肯定されつつも、ひそかに自らを源氏に擬して、冬のすばらしい経験を

語った資通の折角の趣向が、孝標女には一向に通じていなくて、資通を幻滅させたと見られ、孝標女の源氏物語理解は決して深いものではなく、影響も表面的な浅いレベルのものに過ぎなかったと見られる。[7]

前出⑽で資通がひそかに自らを源氏になぞらえたとするならば、野口氏の御見解の通り孝標女には確かに一向に通じてはいなかった事になる。だが孝標女の意識（ないし無意識）は前出(4)～(9)にもとずいて考究した通り、どうやら資通に薫を重ね合せていたようだから、

⑿ 宇治大君は匂宮が中君と結ばれて後の、止むを得ない通いの中絶えの時にも、死の床に臥して薫の看護を受けつつも死を願い、死に切れぬ場合に備えての受戒を拒まれる所でも、男女の深い仲になった後互いに「見劣り」しての、愛の風化を恐れる気持を反芻し、そして彼女は冬の吹雪の激しい夜薫に看られつつ死に、忌み籠り中の薫は、冬の月夜の雪景色に鐘の音を聞いて、大君を失った断腸の思いを嚙みしめつつ、歌を詠む【橋姫】。

の展開部分と照合（コレクト）させる時、恐らく資通が熱烈にかき立ててくれた冬への思いは、孝標女の心にますます薫に看られつつ、しかし結ばれない侭逝った、かの大君への思いをかき立てるよう作用したのではなかろうか。相手になみなみならぬ好意は保ちながらも、互いに見劣りする後腐れの生ずるような縁は結びたくない、引込み衝動にもやはり通い合うものがあるようだ。つまり著者には自分自身を大君的に形成する作用が働いたのではなかろうか。

⒀ 長久五年（一〇四四）37歳――春頃、のどやかなる夕つ方、（資通が）まゐりたなりと聞きて、その夜もろともなりし人とゐざり出づるに、外（と）に人々まゐり、内にも例の（公卿・殿上人の応対係の）人々あれば、出でさいて入りぬ。あの人（資通）もさや思ひけむ。しめやかなる夕暮を推し測りてまゐりたりけるに、騒がしかりければ、まかづめり。　かしまみて鳴戸の浦にこがれ出づる心は得きや磯のあま人　とばかりにて止みにけり。あの人柄もいとすくよかに、世の常ならぬ人にて、その人はかの人などもたづね問はで過ぎぬ。

の所では、一見見込み違いの（そして実は予定通りの？）すれ違いが展開する。「いとすくよかに、世の常ならぬ」とある所あたり、

⒁ (5)の事の後薫は帰京後、弁の君を介して渡すようにとの事で、八宮家の姫君宛に――御文奉り給ふ。懸想立ちてもあらず、白き色紙の厚肥えたるに、……「うちつけなるさまにや、とあいなく止め侍りて、残り多かるも苦しきわざになむ。かたはし聞え置きつるやうに、今よりは御簾の前も心やすく思し許すべくなむ。（父八宮の）御山籠り果て侍らむ日数も承りおきて、いぶせかりし霧の迷ひも晴るけ侍らむ」などぞ、いとすくよかに書き給へる。【橋姫】

⒃ 好色の老女官源典侍をめぐる鞘当ての直後の事――公事多く奏し下す日にて、（源氏も頭中将も執務中）いとうるはしくすくよかなるを見るも、かたみにほほ笑まる。【紅葉賀】

などの例と照合（コレクト）する時、生真面目、謹直、飽くまでもあらまほしさを維持して、決して逸脱せぬ、でき過ぎた完全紳士、必死に孝標女の事を捜してはくれない歯がゆさが、女にとっては薫に対する歯がゆさと同じ物足りなさで重ね合わされている感があり、そこから逆

算して、「かしまみて……」の歌で、「磯のあま人」とあるような傍観者に見立てられたのは資通と考える他ないのではなかろうか。その場合相手に届けられず、心に浮んだだけの歌だから、孝標女にふさわしからず?大胆なのか、ないしは相手に届けられたにせよ、すれ違い確定で憚りなくおのが真情をさらけ出したものかとも考えられ、また一方では人妻なればこその大胆さ=危険な情念も、控え目さとアンヴィヴァレントに働いたものとも、観察されよう。

(10)(12)(14)と一貫して見る時目立つ双方の消極性は、人妻故のスキャンダルを恐れたからだとか、資通にとって孝標女が大して関心を引くに足る女ではなかったからだとか、ある程度は言えても、必ずしもそれらでは完全には割切れないものが感じられる。あたかも孝標女は資通とすれ違わねばならなかったかのように、意識的にか無意識的にか実らざる恋の回路=潜在文脈にはまり込んだ孝標女像が感じられてならない。自分を宇治大君に見立て、意識ないし無意識の呼び求めて止まない悲恋の香に浸る絶好の機会、ないしは悲恋を味わう〈好餌〉として、薫のイメージを重ね合せた資通との出会いと、悲痛なすれ違いドラマの潜在する深層の回路にはまり込む、無意識的引用によるすれ違いと別離への熱中であり、言わば無意識的自己劇化の独り芝居へののめり込みと見られ、表現のレベルに留まらない深い引用と考えられ、引用(というディスクール)に吸い寄せられ、つかまったのは表現以前の著者自身の方だったと観察されよう。

(17) 寛徳二年(一〇四五)38歳——今は昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て、親のものへるてまゐりなどせで止みにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢になりて、二葉の人をも思ふさまにかしづき生ほし立て、我身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までの事をも思はむと思ひ励みて、霜月の廿余日石山に参る。

かくして資通を薫に重ね合せて理想化する、究極の意識的ないし無意識的演技=行動=作品、表現の論理で、深層に達する深さで文学の毒の十分な毒抜きをなし得たからこそ心機一転、宗教に頼り切る世俗的現実的利益、蓄財の願いへと見事に切換えられたのではなかろうか。この場合石山詣でにわざとのように酷寒の霜月が選ばれた点にも意味があるのではなかろうか。

(18) 永承元年(一〇四六)39歳——その返る年の十月廿五日、(後冷泉帝の)大嘗会の御禊とののしるに、初瀬の精進始めて、その日京を出づるに、さるべき人々「一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見る物を、月日多かり。その日しも京をふり出でて行かむもいと物狂ほしく、流れての物語ともなりぬべき事なり」など、はらからなる人(定義?)は言ひ、腹立てど、ちごどもの親なる人(夫後通)は「いかにも〳〵心にこそあらめ」とて、言ふに従ひて出だし立つる心ばへもあはれなり。共にゆく人々も、いといみじく物ゆかしげなるはいとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかる折に詣でむ志を、(観音も)さりとも思しなむ。必ず仏の御験しを見む」と思ひ立ちて、その暁に京を出づるに、二条の大路をしも渡りていくに、さきにみあかし持たせ、供の人々浄衣姿なるを、そこら桟敷どもに移るとて、いき違ふ馬も車も徒歩人も、「あれはなぞ〳〵」と安からず言ひ、驚き、あさみ笑ひ、嘲る者どももあり。

こと大嘗会御禊日の長谷詣で旅立ち強行の場面では、自虐的であてつけがましく、わざと依怙地になっているような異常なひたむき

ささえ感じられる。はらからの末代までの家門の恥を残す歴史的愚行、気狂い沙汰だとの怒りを、妻の制御し難さには匙を投げている感のある夫の優しさ（本質的には冷たいのだろうが）を楯にはね返して、故意に他に月日も多いのに、よりにもよって御禊当日を長谷詣での出発日にしたのと同様に、他にコースがないわけではないのに、御禊の行幸パレードのコースになっていて、雑踏する「二条の大路をしも」旅立ちのコースにし、まるで自らをさらしもの、見世物化するかのように、わざと人目につき、人人の嘲りをより一層甚しくし、自らを鞭打つかのように、自ら進んで恥ずかしめを受ける事で、言わば神となるための受難を型取る事で、自身を浄化・聖化して、仏に近づきたい（距離的にのみでなく）意識ないし無意識が強く作用しているかのようで、単なる自己顕示欲からでなく、やはり強烈な宗教的人間のイメージの顕著な現出なのではなかろうか。つまり人がファナティックな興奮に捉えられ、それが高まった挙句、異常な意気込みを持って行動し始めた時、何かに取り憑かれたようになった途端顔を出すのが、神化・宗教化の普遍的〈テキスト〉なのである。勿論著者の場合のれんに腕押しのような、甚だ物足りない夫から、何らかの強烈な手ごたえを引出そうという甘えの底流はあったにせよ、こうした局面で忽ち浮上する深層の世界の一端が覗けているようだ。「必ず仏の御験しを見む」の「む」は推量と取るより意志と取る方が、ここの文脈によりふさわしいであろう。そうとするとここには強い意気込み、意欲が現れている事になろう。かつ王権最高の儀礼（ギレイ）大嘗会をあえて蹴る事は、彼女の深層では源氏物語的世界への決然たる訣別でもあったろうか。それはまさに宮廷的な恋遊びの世界に、決然と背を向けて、ひたすら宗教の道に自閉せんとする浮舟と響き合うかたくなさでもあり、著者にとって源氏物語の完結にも重ね合わされる、一つの終りを示すわざでもあり、そこに無意識層の深みに達する形で、一貫して流れる深層のテキストの作用があったのではなかろうか。

(19) 立遅れたる人人も待ち、いと恐しう深き霧をも少し晴けむとて、法性寺の大門に立留りたるに、田舎より物見に上る者ども水の流るるやうにぞ見ゆるや。全て道も避りあへず、物の心知りげもなき怪しの童べまで、引避きてゆき過ぐるを、車を驚き、あさみたる事限りなし。これらを見るに、げにいかに出で立ち道なりともおぼゆれど、ひたぶるに仏を念じ奉りて、宇治の渡りにいき着きぬ。そこにも猶しもこなたざまに渡りする者ども立混みたれば、舟の楫取りたるをのこども、船を待つ人の数も知らぬに心奢りしたるけしきにて、袖をかいまくりて顔に当てて、棹に押しかかりて頓に舟も寄せず、うそぶいて見回し、いといたう澄みたる様なり。無期にえ渡らで、つくづくと見るに、むらさきの物語に宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかしき所かなと思ひつゝ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君のかゝる所にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。……長谷寺参詣記へ

ここでも祭儀見物に上京する大群衆の流れにさからって、田舎に向かう孝標女一行の非常識で突飛なふるまいはひたすら嘲笑の的になっていて、さすがの著者も一寸弱気になり、気が挫けそうになってたじろぐが、仏にすがる気持で頑張る。渡し場で反対方向はがらすきのはずだのに、「無期にえ渡らで」とあるのは（著者一行だけ

を対象としたものではないとはいえ）、一種のいじめ、いやがらせであり、これまた途上相重なる危難への脅えと共に、受難の文脈で捉えられるのではなかろうか。こうした所に事象の方から〈論理〉の方へすり寄って来て、意味性を帯び出す不思議さがあるのだが、こうした現象には既に先蹤があった。それは叔母道綱母の蜻蛉日記、天禄元年（九七〇）叔母の推定年齢三十五歳七月の事、とみに冷たさを加える夫婦仲に堪えかねた叔母が、スケジュールとしては予定したものの、実行段階ではあたかも出奔であるかの如き行動方式で、高ぶり切った情念をさらけ出した石山詣での道程で、宗教的論理により添った筋書きが浮上して来た過程(8)と余りにも相似る。こうした面にも孝標女を制する蜻蛉日記の〈影（シャドウ）〉の一つが、顕現していたと見るべきなのであった。なお著者がここで舟の楫取り等の意地悪でせき留められている間、相変らず宇治八宮の娘達の事に関心を示しているのでは、文学を毒抜きした事にならないではないかとの御指摘(9)を受けたが、前稿(10)ならびに本稿の資通との出会い記事の分析で明らかになったように、著者の源氏物語熱中時は、我身を源氏物語の世界にまるごとどっぷりつけ込んで、心の思いも身の行為も共にそのものが、源氏物語の引用そのものと化していた感があり、いくら「ゆかしく思ひし所」だの「げにをかしき所かな」だの「まづ思い出でらる」だの言っても、もはやこのくだりでは宇治女君達の世界は、飽くまでも著者の外側に眺められた〈風景〉でしかなくなっているように思われる。

(20) 二三年四五年隔てたる事を、次第もなく書き続くれば、やがて続き立ちたる修行者めきたれど、さにはあらず、年月隔たれる事なり。……以下年次不詳で、春の駿馬参籠、その二年後の（ト言ッテモ石山寺参詣ノ間隔デ言ウカ？）石山参籠、再度の初瀬参詣と、物詣で記事集中。

この記事では物詣での連続という〈虚構〉への、プレッシャーをかけたものこそ重要である。本来虚構とは必ずしも話をより面白くするためといったような、対読者サービス意識がからむだけでなく、作者自身の止むに止まれぬ衝動＝論理的必然でもあるのだが、そしてそれは資通関係記事の始まりに時間的さかのぼりが見られるゆえんでもあるのだが、ここでは実録のたてまえ上、フィクション物でさえあり得なくもない、表現の論理ないし行動にあるべき論理と、事実との割れ目への釈明を迫られたのではなかろうか。

以上更級日記への一視点とでもいうべきものであるが、そもそも日記文学の表現には、その前提としての行動の脈絡＝ダイナミックスがあるようであるが、更級日記（蜻蛉日記が既にそうなのだが）のこの場合、行動の前提に（ダイナミックスとしての）筋書きがあり、筋書きが現象を生み、現象の方が筋書きに倣うかのようで、実は行動そのものが既に何らかの引用であるかのようで、表現以前のディスクールが潜在先行し、予め伏在する筋書きとして、行動の方を制御するように思われてならない。

つまり日記する事の前提としての身体表現（パフォーマンス）があり、すなわち顕在化テキスト以前に行動＝身体表現があり、そのまた以前に行動のテキスト（パフォーマンス）としての潜在テキストが既在し、顕れたテキストとその前提としての隠れたテキストがある事で、テキストは著者自身の身体表現を介して言わば二重構造化しているのであり、そして深層の筋を埋め込み、深層の型（ダイ）＝回路に捉えられ、深層の世界に引きずられていないと、深い文学とは言えないのではなかろうか。更級日記は見

事にこの条件を充たしており、表現以前の行動が既に意味性を帯びる事で、ナラトロジイにも堪え得る〈文学〉を言い得よう。特に長谷詣での所、高まり行くおのが情念の世界にのめり込み出すや、著者の進路は忽ち記号性の吹き溜まりと化し、著者の行動は文化的シンボル行為の型態学にも堪え得る深い意味性（インプリケーション）を帯びてしまい、行為や事象の方がシンボルを追いかけ、フィクションを追い越すドラマ性が発揮されてしまっている感がある。そこには予め埋め込まれた、人為的テキストに勝るとも劣らぬ深い意味性を帯びた、潜在する天与既在の深層テキストを、著者の行動と、それを核としてそのまわりに凝集する現象群がフォローして行くかのような神秘性さえ感じられる。そうした現象結合はあるいは偶然的結合でなく、必然的結合なのであり、ユング流に言う神秘的なシンクロニティー（共時性）の発生がもたらしたものかも知れない。

結局本日記の場合、先＝潜在する深層の回路に身体ごとはまり込み、意識と無意識が身体を介して結合する事によって、初めて深い文学に達し得た感があり、そのように無意識層をも取込みながら、自分自身を演出して行ったようで、あるべきテキストを（無意識的な深層にまで達する深さで）よみ、フォローして行くのは、まず著者自身だった事になるのではなかろうか。これまでの定石的な見方では、日記文学の文学性の本質のある貴重な一面を、究明し得なかった事になるのではなかろうか。我我には更級日記の隠れた論理性・記号性を探り出す試みが必要であろう。文学らしい文学が有意識の世界だけで（作者にとっても読者にとっても）、全て辻褄が合うというオプティミズムには加担できない。

更級日記に躓いて来た旧来の読みでは、その文学的な深さには達し得なかったのではなかろうか。あるいはそれは著者自身の韜晦の意図から、浅い文学、凡作と決めつけられる事自体、著者にとって喜ばれるべき読み方、ないしは誤解ですらあったのかも知れないのだけれども。そして、前稿[10]に取上げた部分も併せ考える時、本日記の事象にははっきりした意味性と、事象間における意味性の脈絡が探り出される場合があり、その点で本日記にはよく言われて来たように単なる実録性を超えた深い私小説性が備わっているように思われてならないのである。

付記――この小論は昭和六十二年五月の中古文学会春季大会における発表にもとずいたものである。

〈注〉

(1) 犬養廉氏「孝標女に関する試論――主としてその中年期をめぐって――」『国語と国文学』昭30・1月など。
(2) 玉井幸助氏『更級日記評解』昭27・10月。
(3) 『新潮日本古典集成』注昭55・7月。
(4) 犬養廉氏『日本古典文学全集』注昭46・6月。
(5) 関根慶子氏『講談社学術文庫』下注昭52・9月。
(6) 「春秋優劣論と冬の月」『東京成徳短大紀要』第十七号昭59・3月。
(7) 「更級日記と源氏物語――菅原孝標女の作家的資質――」『上智大国文学科紀要』第二号昭60・1月。
(8) 別稿「蜻蛉日記の謎もしくは創造の神秘」『論集日記文学』（仮称）笠間書院校了近刊予定。
(9) 付記学会発表時の犬養廉氏の御質問・御批判による。
(10) 拙稿「更衣日記の源氏物語受容の一面――東山滞在記後における『春までの命あらば』の位置づけを中心に、潜流する文脈――」『語文』第四八輯昭62・2月

(付記) 更級日記の本文は藤原定家筆御物本影印により、若干の校訂本文と照合しつつ、源氏物語の本文は青表紙系明融本ならびに大島本校訂本文の若干を見比べつつ、それぞれ引用した。

――神戸商科大学教授――